

REPORT 2013

2013年度活動報告書

世界自然遺産
知床を未来へ

皆様からのご支援が、
知床の自然保護活動を
支えています。





2013年度の年次報告書に寄せて
2013年度の決算概要
2013年度の賛助会の状況
2013年度の寄附状況

【公益事業】普及啓発事業

- 地域向け環境教育
- 一般向け講座・イベント
- 学習教材開発・運用
- 職員研修
- ボランティア活動の推進
- 人材育成・就業体験の受け入れ
- 情報発信・サポーター拡大
JBN
- 講座・イベント運営
- 講演会運営・啓発資料作成業務
- ビジター向けインフォメーション・環境教育
- 知床自然センター内外刷新

【公益事業】施設管理事業

- 知床自然センター
- 知床自然教育研修所
- 知床五湖園地
- 羅臼ビジターセンター管理運営業務
- ルサフィールドハウス管理運営業務

【公益事業】調査研究・野生動物対策事業

- エゾシカ個体群の動態に関する調査
- 知床の暮らしと生き物を守る電気柵導入実験
- ルシャ地区におけるヒグマの生態等に関する調査
- 岩尾別地区におけるヒグマの生態等に関する調査
- 希少鳥類などの長期モニタリング
- 海生哺乳類のモニタリング
- 水域における生物群集のモニタリング
- 学術的な交流と成果公表
- シホテ・アリンとの世界遺産交流
- 知床GISデータベースの作成

- ヒグマ対策手法の開発
- ヒグマの管理対策
- 自然環境の管理対策
- エゾシカ関連業務
- 外来生物の調査・対策
- 地域住民とヒグマの安全安心共存プロジェクト
- 遺産地域とその周辺における調査業務
- 科学委員会等運営業務

【公益事業】公園利用管理事業

- 適正利用・エコツーリズム検討業務
- 知床五湖利用適正化業務
- カムイワッカ地区利用適正化業務
- ホロベツ地区活用検討業務
- 知床半島先端部地区利用の心得推進業務
- 知床世界自然遺産地域における適正利用推進業務
- 知床国立公園国際化対応普及啓発業務
- 羅臼町エコツーリズム検討業務
- 学術交流と成果発表

【公益事業】森林再生事業

- しれとこ100平方メートル運動森林再生業務
- しれとこ100平方メートル運動普及推進業務

【収益事業】

- 販売・有償貸出業務
- 羅臼研究支援センター維持管理業務
- 研修・講演・視察対応業務

【法人会計】

- 財団法人管理運営事業

【組織概要】

目次、本文中にあるマークは、寄附金・賛助会費によって実施している事業であることを示しています。

■知床財団の使命

私たち知床財団は知床半島をホームグラウンドとし、世界遺産知床の自然を守り、より良い形で次世代に引き継いでいきます。野生動物やその他の自然環境の保全・管理に携わる組織として常に先駆者であり続け、人間が自然と親しみ調和していける社会の発展に寄与します。

2013年度はゴールデンウィーク中にまとまった積雪に見舞われ、知床横断道路の開通が6月にずれ込むなど天候不順の中でのスタートでした。

前年度は、両町においてヒグマの出没が多発し、昼夜を問わずその対応に追われましたが、2013年度は例年並みの出没状況に落ち着きました。その一方で、斜里町岩尾別川沿いでは9月以降、人をあまり気にしない2頭の若いヒグマが日中に連日出没し、彼らを撮影しようとわずか数メートルの至近距離まで接近するカメラマンや観光客が後を絶たず、事故につながりかねない危険な状況が続きました。この岩尾別川では過去にも同様の事例が繰り返されており、なかなか抜本的な問題解決に至らないもどかしさを感じています。

当財団の行うヒグマ対策にはクマに対するものだけでなく、人に対するものも含まれますが、羅臼町ではこれまでの小中高校に加えて町内全幼稚園でヒグマ授業を実施、斜里町では知床財団の行うヒグマ対策に対する地域住民の疑問や質問などに直接答える「クマ端会議」と題した場を初めて設け意見交換を行うなど、ヒグマとの共存への理解を進める新たな取り組みを行いました。

前年度は、ヒグマの出没多発で地上歩道の閉鎖が続いた知床五湖も、2013年度は一転して落ち着いた状況となったうえ、利用調整地区制度導入から3年を経過し制度の認知も進み、過去最高の利用認定者数を記録しました。制度を単なる規制ではなく、付加価値として定着させる現場の努力が実を結びつつあります。

一方で、多様な自然環境を有する知床と評価されながらも、観光船ツアーと知床五湖散策に利用者が集中する2極化が進み、エコツーリズム推進の観点からも現状は決して満足できる状況ではありませ

ん。さらに冬期や先端部地区の利用、野生動物観察を目的としたツアーのあり方など、世界遺産地域の利用に関する課題は山積しており、知床財団として今後も積極的に制度設計に参画してまいります。

ここ最近ではエゾシカ対策に関する事業が冬期間の主要な受託事業となりつつあります。2013年度は知床岬、ルサ・相泊、幌別・岩尾別、ウトロの各地区で捕獲事業を行いました。事業実施地区では、徐々にではありますが植生回復などの変化が見られています。知床における当財団のこれまでの取り組みは、先行事例としてシカ対策に苦しむ他の地域のモデルとなりつつあります。

また、2月にはロシアのシホテ・アリン自然保護区所長と副所長が来訪されました。お隣同士の世界自然遺産登録地として、2012年秋以来、相互に訪問し交流を深めています。海外にも視野を広げ、参考となるものは吸収しつつ、地域への情報発信はもとより知床から国内外への情報発信にも力を入れていきたいと思います。今後とも、ご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

関根 郁雄 Ikuo Sekine

北海道斜里郡小清水町出身。斜里町政に長く関わり、日本のナショナル・トラスト運動の草分けとなった『しれとこ100平方メートル運動』スタート後の昭和54年度からは、企画振興課長として、この運動を精力的に推進した。その後も斜里町助役、副町長を歴任。平成5年には知床の世界遺産登録を提案、当時の午来町長とともに登録に向けた取組みに邁進し、知床の自然保護活動の歴史に新たな1ページを刻んだ。

【歴代理事長及び任期】

藤重千秋	(1988年9月23日～1997年9月23日)
法量 武	(1997年9月24日～2003年3月31日)
森 信也	(2003年4月1日～2009年3月31日)
関根郁雄	(2009年4月1日～)

2013年度の総事業費は2億7千296万円

知床財団の事業費は「独自事業」、「斜里町・羅臼町委託事業」、「その他委託事業」の大きく3つに分類されます。中でも、独自事業は賛助会費や寄附金が重要な財源となっています。賛助会員をはじめとする多くの方々の継続的なご支援により、2013年度は全69事業を行いました。

1. 独自事業

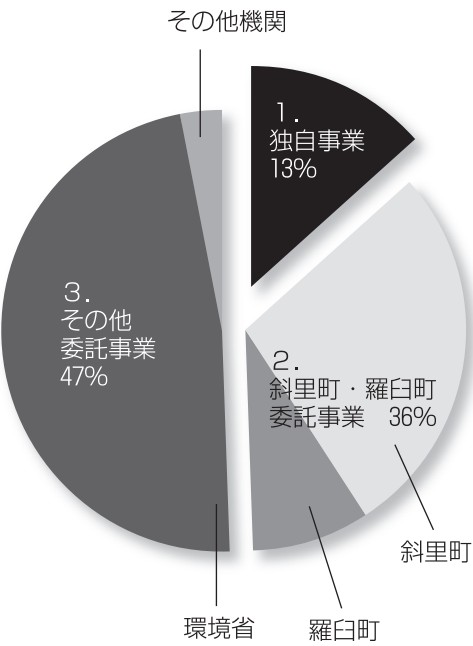
(事業数29 事業費3千667万円)
賛助会費や寄附金の他、知床自然センターおよび羅臼ビジターセンターでの販売物収入が主な財源となっています。

2. 斜里町・羅臼町委託事業

(事業数13 事業費9千865万円)
斜里町からは、知床自然センターや知床自然教育研修所などの指定管理業務やしれとこ100平方メートル運動の現地業務などを受託し、羅臼町からは羅臼ビジターセンターやルサフィールドハウスの運営業務を受託しました。また両町からヒグマ管理対策業務、自然環境保護管理対策業務をそれぞれ受託しました。

3. その他委託事業

(事業数27 事業費1億3千764万円)
環境省やその他機関から、各種業務を受託しました。



2013 年度の決算報告

科 目	金 額	科 目	金 額
I 一般正味財産増減の部		2. 経常外増減の部	
1. 経常増減の部		(1)経常外収益	
(1)経常収益		その他特別収益	0
基本財産受取利息	12,750	経常外収益計	0
事業費収益	236,290,129	(2)経常外費用	
寄附金	15,680,444	経常外費用計	0
普及研修費収益	18,134,689	当期経常外増減額	0
その他の事業費収益	351,593	当期一般正味財産増減額	3,729,838
雑収益	2,494,603	一般正味財産期首残高	76,915,470
経常収益計	272,964,208	一般正味財産期末残高	80,645,308
(2)経常費用		II 指定正味財産増減の部	
事業費	266,931,029	受取指定寄附金	9,500,000
管理費	2,303,341	一般財産振替寄付金	-6,845,197
経常費用計	269,234,370	当期指定正味財産増減額	2,654,803
当期経常増減額	3,729,838	指定正味財産期首残高	52,034,197
		指定正味財産期末残高	54,689,000
		III 正味財産期末残高	135,334,308

web <http://www.shiretoko.or.jp/about/outline/teikan>

知床財団の活動は、賛助会員をはじめとする多くのサポーターの皆様に支えられています。2013年度は新たに106名、2団体の方にご入会いただきました。皆様の温かいご支援に対しまして心から厚く感謝と御礼を申し上げます。

なお、知床財団への会費は、所得税、住民税、および相続税における優遇措置を受ける対象となります。詳しくは知床財団ホームページ、または税務署にお問い合わせください。

URL <http://www.shiretoko.or.jp/supporter/zei/>

(1) 2013年度の会員数

個人年会員	個人終身会員	法人年会員	法人特別年会員
683名	1,044名	36団体	6団体

(2) 新規入会

個人年会員100名、個人終身会員6名、法人年会員1団体、法人特別年会員1団体の入会がありました。

私たちの活動をご支援いただき、深く感謝申し上げます。

(以下、敬称略)

法人年会員	所在地
株式会社 小柳中央堂	北海道

法人特別年会員	所在地
ナチュラル株式会社	福岡県

(3) 法人特別年会員

法人名	所在地
商船三井フェリー	東京都
シーライヴ株式会社	大阪府
エース株式会社	東京都
光和メディカルクリニック ヘルスケアセンター	東京都
Hoyu Global Group	ジャカルタ
【新】ナチュラル株式会社	福岡県

※【新】は2013年度の新規入会法人

(4) 法人会員一覧

法人名	所在地
知床ランドホテル	北海道
オリジナル設計株式会社	北海道
株式会社 ユートピア知床	北海道
株式会社 須田製版 釧路支店	北海道
有限会社 しれとこ村つくだ荘	北海道
国民宿舎 桂田	北海道
有限会社 アウトバック	岩手県
武庫川女子大学附属高等学校	兵庫県
知床オブショナルツアーズ	北海道
有限会社 みさき水産	北海道
有限会社 赤岩水産	北海道
羅臼漁業協同組合	北海道
ウトロ漁業協同組合	北海道
知床ナチュラリスト協会	北海道
オコツク漁業生産組合	北海道
株式会社 辻中商店	北海道
有限会社 木切別漁業	北海道
峯浜水産有限会社	北海道

法人名	所在地
株式会社 リリーネット	広島県
医療法人 慈久会 旭が丘ファミリークリニック	三重県
有限会社 知床ネイチャークルーズ	北海道
有限会社 らうす第一ホテル	北海道
株式会社 秀岳荘	北海道
株式会社 フェニックス	東京都
小川建設株式会社	北海道
広島フットケア	広島県
いるかホテル	北海道
株式会社 大石アンドアソシエイツ	東京都
知床アルパ株式会社	北海道
株式会社 スタンフット	東京都
ピックス株式会社	北海道
民宿 鷺の宿	北海道
知床クルーザー観光船 ドルフィン	北海道
田島公認会計士事務所	東京都
サージミヤワキ株式会社	東京都
【新】株式会社 小柳中央堂	北海道

※【新】は2013年度の新規入会法人

一般寄附としてお寄せいただいた件数は77件、総額2,869,240円にのぼりました。内、個人の方からは72件、法人からは5件でした。また、寄附金で実施される事業を指定できる指定寄附としては、1法人より総額9,500,000円のご寄附をいただきました。ご支援いただいた皆様に、心より御礼申し上げます。

(1) 一般寄附をいただいた法人

法人名	金額(円)
アサヒビール株式会社	1,000,000
知床斜里町観光協会	10,000
株式会社 フェニックス	86,265
知床オブショナルツアーズ	30,000
有限会社 アウトバック	10,000

(2) 指定寄附をいただいた法人

【ダイキン工業株式会社 寄附額：9,500,000円】 

ダイキン工業株式会社様より知床財団・斜里町・羅臼町に対し、5年間で総額1億1千万円のご寄附をいただく四者協定は3年目を迎えました。2012年度に引き続き、知床財団は斜里町・羅臼町と協力しながら以下の事業を実施しました。

- ・「ルシャ地区におけるヒグマの生態等に関する調査」事業 (P19参照)
- ・「地域住民とヒグマの安全安心共存プロジェクト」事業 (P29参照)
- ・「しれとこ100平方メートル運動森林再生業務」事業 (P37参照)
- ・「しれとこ100平方メートル運動普及推進業務」事業 (P39参照)

公益事業 普及啓発事業



▲ウトロ小学校での野外授業



▲知床キッズの夏キャンプでの火おこしの様子



▲ウトロの地元住民対象の「クマ端会議」の様子

地域向け環境教育業務

地域が支える世界遺産・知床を目指して、知床の自然とその自然に携わる人々の活動をより深く知ってもらう機会を様々な形で地域に提供しています。

(1) 学校教育

斜里町の学校

斜里町では、ウトロ小中学校全校生徒を対象にクマ授業を計3回、峰浜小学校、以久科小学校の各全校生徒を対象にクマ授業を各1回ずつ実施しました。また、ウトロ小学校の総合学習の一環として、秋から冬にかけて1～2年生、3年生、4～5年生、6年生を対象とした環境教育授業をそれぞれ実施しました。



▲ウトロ小学校でのヒグマ授業

羅臼町の学校

羅臼町では、中学校・高校一貫教育のカリキュラムとして継続して行っているヒグマ授業を、計5回実施しました。中学1年生、中学3年生、高校2年生の全生徒を対象に、各学校に出向いて授業を行っています。また、今年度は羅臼町内の全幼稚園でのヒグマ授業も初めて実施しました。

羅臼町公民館などと共に羅臼町内の小学生を対象にして実施している知床キッズ（羅臼町ふるさと体験教室）は、5月から2月までの間に計10回の講座を企画・実施しました。例年より参加者が多く、新しく工夫したプログラムに、熱心に取り組んでくれました。



▲羅臼の春松小学校でのヒグマ授業

(2) 一般向け講座・イベント

新しい試みとして、知床財団が行うヒグマ対策活動に対し、住民の理解と協力を得ることを目的に、お茶とお菓子をいただきながら職員とウトロ住民が直接意見交換をする「クマ端会議」と題した場を設

けました。ヒグマ対策について日ごろ抱いている疑問や質問など、ウトロ住民の生の声を聴く機会となりました。

学習教材開発・運用業務

2013年度、ヒグマ学習教材トランクキット1号機の貸出し実績は10件、2号機の貸出し実績は5件となりました。貸出し出張期間以外では、職員が行うヒグマ授業や広報イベント、知床自然センター内での観光客向けレクチャーなどに活用しています。

ヒグマに続くトランクキットとして、海獣版の作製プロジェクトを立ち上げました。また、エゾシカを題材とした学習教材を旭山動物園と共同開発することについて検討を始めました。



▲トランクキットを使ってレクチャーする職員



▲苗の移植のボランティア



▲普及活動ツールの補修をするボランティア



▲ダイキン工業株式会社様の社員によるボランティア

職員研修

海外視察

2013年3月、イギリスの自然保護区の管理運営やリクリエーション政策についての知見を得ることを目的に、視察研修として東京大学、岩手大学と合同で知床財団職員1名を現地へ派遣しました。イギリスは、しれとこ100平方メートル運動のアイディアの元となったナショナルトラスト発祥の地であり、フットパスに代表される長距離自然歩道の仕組みが有名です。研修では、コッツウォルズ特別景勝保全地域、サウズダウンズ国立公園の2ヶ所の保護区を訪問、実際にフットパスを体験し、現地の管理組織との意見交換を実施しました。歴史が長く土地利用

の複雑なイギリスは、日本と共通する点も多く、次の時代の知床国立公園の利用のあり方を考える上でも有意義な研修でした。

道東自然系施設ネットワーク

2013年2月13日・14日の2日間、道東自然系施設ネットワークが主催する勉強会に職員2名が参加しました。入館者数を伸ばしている教育施設の運営方針やイベント、展示物などの事例について学んだ他、各施設が抱えている問題点や利点、活用できそうな取り組みについて意見交換を行いました。



▲イギリス視察にて現地スタッフに話を聞く職員



▲道東自然系施設ネットワークの総会



▲イギリスのコッツウォルズ地方のフットパス

ボランティア活動推進業務

森づくり作業や普及活動を登録ボランティアの皆様にお手伝いしていただいています。

(1) ボランティア参加者

2013年度のボランティア登録者数は152名となりました。「100平方メートル運動の森・トラスト」の現場での森づくりや羅臼ビジターセンターを拠点にした展示物作製作業などに道内外から41名の参加がありました。総活動日数は64日間、のべ参加人数は107人におよびました。

(2) ダイキンボランティア

ダイキン工業株式会社様からのご支援の一環として、5月と9月に社員ボランティア計25名の方々にお越しいただき、それぞれ3泊4日の日程で森づくりのお手伝いをしていただきました。5月は季節はずれの大雪が降ったため作業道の除雪作業を、9月は岩尾別川の河畔林再生を目的とした防鹿柵の設置作業を中心に行いました。

人材育成・就業体験受入業務

環境教育や調査研究、公園管理の現場で活躍する人材の教育、育成のため、インターンシップ（就業体験）の受け入れを行いました。主に野生動物や環境保全を専攻する全国の学生から応募があり、夏秋

冬合わせて12教育機関より20名のインターンを受け入れました。外来種の駆除や野生動物対策、希少鳥類の調査から展示物の作成など幅広い活動に従事していただきました。



▲アンテナをふってGPS首輪からデータをダウンロードする職員とインターン

受入先（夏期）	人数
北海道エコ・動物自然専門学校	2
岩手大学	1
日本大学	1
東京農工大学	1
東京農業大学	1
岐阜大学	1
信州大学	1
北海道大学	1
中央大学	1
酪農学園大学	2

受入先（冬期）	人数
神戸動植物環境専門学校	2
日本大学	3
酪農学園大学	1
帯広畜産大学	1
東京農工大学	1



▲知床財団だより



▲知床自然センターだより



▲新しくなった知床自然センターホームページ



▲新しくなった知床財団ホームページ



▲エコプロダクツ2013の知床財団ブース

情報発信・サポーター拡大業務

（1）地域向けの情報発信

地元や近隣の地域の方々に知床財団の活動を知ってもらうため、知床財団の活動、イベント情報、知床の旬の自然情報を掲載した「知床財団だより」を2ヶ月に1回発行し、斜里・羅臼両町の広報誌に折り込みました（発行部数：斜里町5,050部、羅臼町2,050部）。

また、知床自然センターの展示やイベント、最新の取り組みを紹介する「知床自然センターだより」を作成し、ウトロの宿泊施設および観光関係施設（全27施設）に配布しました。

（2）ホームページによる広報の強化

6月中旬にホームページを大きくリニューアルしました。今回のリニューアルでは、既存のホームページの内容を見直し「知床財団の活動を紹介し、その活動に対する理解と支援をお願いするコンテンツ」と「知床自然センターの利用案内や知床国立公園の自然情報、散策時のルールやマナーなど、知床に来訪される一般の方々にとって役立つと思われるコンテンツ」とに分け、それぞれ「知床財団のホームページ」と「知床自然センターのホームページ」として独立公開しました。これにより、各ホームページ上でより詳細な情報を分かり易く提供することが可能となりました。

（3）旅行者向けの情報発信

旅行者の皆様に対し、知床財団の活動紹介や賛助会員入会のご案内のため、斜里・羅臼両町の宿泊施設にご協力を仰ぎ、閲覧用の会報誌「SEEDS」を町内の旅館やホテルなど宿泊施設に置かせていただきました。また、賛助会員募集パンフレットを地元

の旅館のロビーなどに置かせていただきました。協定先である旭川市旭山動物園には、昨年度までに製作した知床財団の活動紹介パネル等を引き続き展示しています。また、図書館には賛助会員募集のパンフレットやSEEDSのバックナンバーファイルが常設されています。

（4）賛助会の運営

2013年度は、年個人会員100件、個人終身会員6件、年法人会員1件、法人特別年会員1件の入会がありました。法人特別会員は昨年度に続き1件の入会があり、個人年会員については昨年度の約2倍の新規入会がありました。賛助会員向けの会報誌「SEEDS」は昨年度同様に4回発行し、会員の皆様や関係機関の方へ発送しました。

▶
賛助会員向け
自然情報誌
「SEEDS」



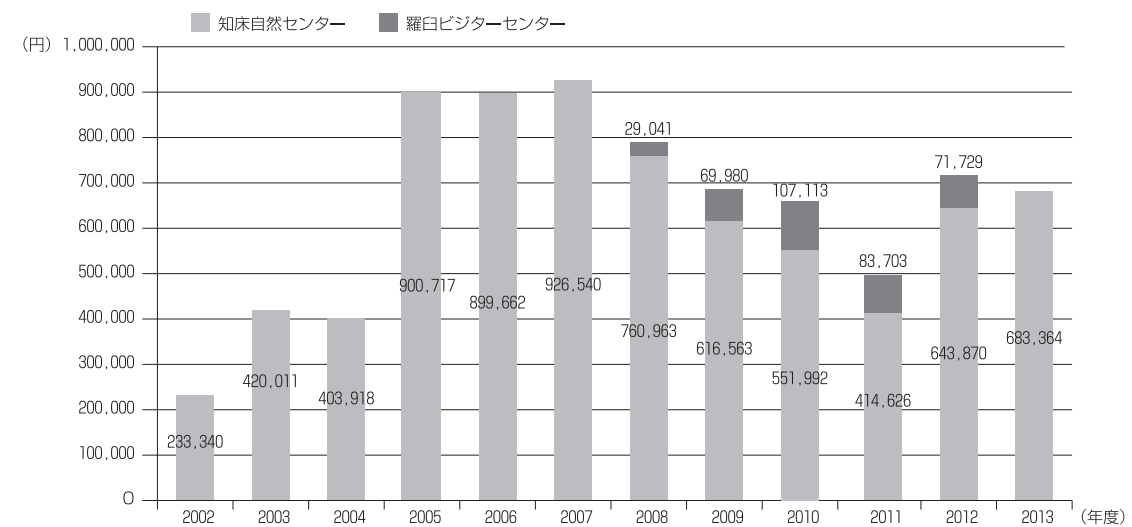
（5）寄附拡大推進事業

知床財団の活動を広く一般の方や企業へPRし寄附拡大へとつなげるため、毎年東京で開催される「エコプロダクツ展」に出展しました。エコプロダクツ展は2013年で15周年をむかえる国内最大級の環境イベントで、開催期間3日間の総来場者数は、約17万人にのぼりました。イベントでは調査研究や普及活動などを伝えるための資料を設置したり、「SEEDS」のバックナンバーを配布したりするなど、知床財団の知名度の向上と活動への理解に努めました。また、自作した知床半島のミニジオラマを使って、知床のエゾシカやヒグマなど野生動物と人との関係や課題についても解説しました。ブース内に設置した募金箱には、来場者の方から43,339円のご寄附をいただきました。また、町内のイベントに

出展し、知床財団が行なっている活動内容について地元への普及に努めました。

2012年度に引き続き、知床自然センター館内における募金獲得強化に取り組みました。ゴールデンウィークや夏休み期間中に毎日実施したミニレクチャーや、館内繁忙時に行った館内ゲリラレクチャーでは、知床の自然の素晴らしさを紹介すると同時に、知床財団の活動を紹介して募金を呼びかけました。この他、インフォメーションカウンターにシカ角の破片やダイナビジョンフィルムを加工したハンドメイドのしおりを置き、募金のお礼としました。これらの結果、2013年度は683,364円の募金をいただきました（前年比106.1%）。

募金箱への寄附額の推移





▲羅臼での「シレットコハナマルレンジャー」



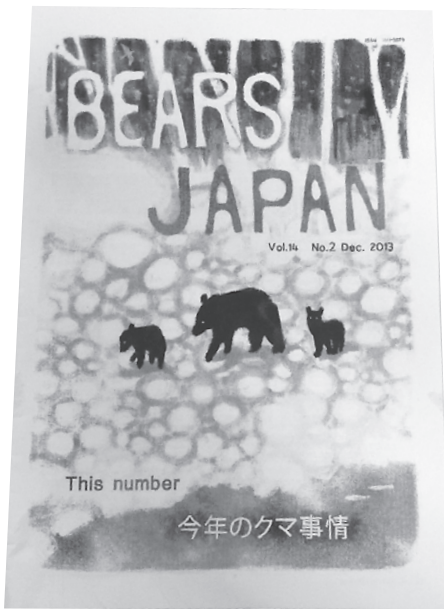
▲舟崎氏によるエゾシカ料理教室

JBN業務

日本クマネットワーク（JBN）からの受託業務として、JBN会員向けニュースレター「Bears Japan」の発行・発送、「ヒグマとの遭遇回避と遭遇時の対応に関するマニュアル」の発行・販売、JBNホームページの運営管理を行いました。

日本クマネットワークは、個人や地域ごとの単独の活動だけでは難しい全国レベルの諸問題や国際問題に関し、必要に応じて社会に対して働きかけを行い、人とクマのより良い関係を構築する活動を行っているNGO組織です。会員は専門家やクマに関心

を持つ一般市民、およそ350名で構成されています。JBN会員向けニュースレター「Bears Japan」は計3回、1,060部を印刷発行し、会員に向けて発送しました。また「ヒグマとの遭遇回避と遭遇時の対応に関するマニュアル」については、店頭および通信販売を通じて計68部を販売しました。ホームページについては、日常的な掲載内容の更新を中心に、幅広い運営業務をJBN事務局と連携して実施しました。



▲JBN 会員向けニュースレター「Bears Japan」

講座・イベント運営

斜里町で2回、羅臼町で2回、知床に係わる野生生物の保護管理や自然環境保全を題材とした講座を開催しました。斜里町では、増えすぎたエゾシカの管理と活用方法をテーマにした連続講座形式とし、1回目は酪農学園大学狩猟管理学研究室の伊吾田宏正准教授をお招きし「意外とイケる！エゾシカは北海道の資源となり得るか？」と題した講演を、2回目は釧路市にある「Restaurant & Community Iomante」の舟崎一馬シェフをお招きし「エゾシカ料理教室」を開催しました。羅臼町では、猛禽類に関する連続講座とし、1回目は羅臼郷土資料館前館長の涌坂周一氏の「シマフクロウを語る」、2回目は獣医師の齊藤慶輔氏をお招きし「オオワシとの共存を目指して」を開催しました。

知床世界自然遺産地域科学委員会の委員を講師に招き、斜里、羅臼両町で「しれとこ科学教室」を開催しました。斜里町では、独立行政法人 北海道立総合研究機構 環境科学研究センターの宇野裕之研究主幹をお招きし、全国のニホンジカの状況と今後必要な保護管理の体制についてお話ししていただきました。羅臼町では、中川元氏によるオジロワシの生態や保護に関する講座を実施しました。

9月8日と15日には、町民参加によるセイヨウオオマルハナバチの防除体制構築を目的とし、啓発イベント「シレットコマルハナレンジャー」を開催しました。2日間で延べ25名の参加があり、13頭のセイヨウオオマルハナバチを捕獲しました。



▲斎藤慶輔氏による羅臼住民向けのワシ講座



▲ヒグマエサやり禁止キャンペーンのメッセージボード



▲知床自然センター館内でのレクチャー



▲羅臼ビジターセンターでのレクチャー



▲知床自然センターイベント「蜜蝋キャンドル作り」

ビジター向けインフォメーション・環境教育業務

(1) 知床自然センター

情報提供と館内展示

インフォメーションカウンターにて自然情報の提供やルール・マナーの普及に努めると同時に、館内の展示や知床自然センターホームページ上で公開しているブログを積極的に更新し、リアルタイムの情報提供を行いました。

夏期には、知床ヒグマエサやり禁止キャンペーン企画実行委員会主催のキャンペーンの一環として特設展示を作製しました。また、館内にモニターを設置し、知床財団作成の絵本「しれとこのきょうだいヒグマ ヌブとカナのおはなし」を朗読付きで常時上映し、人馴れクマをつくらないよう行動すること

の重要性を観光客の皆様に理解していただくよう努めました。

冬期、館内に12面ある柱展示の内、6面を全面改装しました。また、流氷到来時期直前に流氷をトピックにした展示を設置し、ほぼ毎日流氷の定点撮影を行って展示の情報を更新しました。

情報提供と館内展示

ゴールデンウィークや夏休み期間中には、知床の自然の魅力や知床が抱える問題、知床財団の活動などについて、本物の骨格標本や毛皮などの小道具を使いながら職員が解説するミニレクチャーを44回実施し、668人の参加者がありました。

知床ヒグマエサやり禁止キャンペーン企画実行委員会主催のキャンペーンの一環として、ヒグマの対処法を含めた20分ほどのレクチャーを繰り返し行いました。また、キャンペーン時に作成した展示物を利用したレクチャーや、子供達にも楽しく参加してもらえるように〇×カードを使ったレクチャーを実施し、計1,706人の方に聞いていただきました。

その他、職員が日ごろ撮りためた写真や動画を使ったスライドレクチャー、観光船欠航時や荒天時などの館内混雑時に、館内の展示物を利用して行うゲリラレクチャー、ヒグマに関する展示物を細かく紹介する館内ツアーなど、様々な自然解説を行いました。

(2) 羅臼ビジターセンター

来館者に対し、施設周辺の自然情報やヒグマに関する注意喚起、野生動物に接する際のルールとマナーなどを説明するとともに、展示などを活用して通常の自然解説により深みを持たせたミニレクチャーを実施しました。ミニレクチャーは、野生動物の生態や生活史はもちろん、近年顕在化している

野生動物への餌付けや餌やりの影響など人間の行動に起因する課題も取り入れて、奥行きを持たせたものにするよう努めました。実施は、特に来館者が多く見込める夏休み期間に集中して行い、計11回、166人の方にご参加いただきました。

(3) ルサフィールドハウス

知床半島中央部地区及び先端部地区利用者に対し、立ち入る際の留意事項と禁止事項についてレクチャーを実施しました。一般来館者へは施設展示を活用しながら、数多くの鯨類が利用している羅臼の海の豊かさ、羅臼町民による定置網漁、昆布漁、陸域と海域の繋がりが色濃い知床世界自然遺産について解説を行いました。

(4) 五湖フィールドハウス

知床五湖フィールドハウスでは、知床五湖利用調整地区の指定認定機関として職員が常駐しています。地域内最大の観光スポットの施設として出来るだけ多くの方に、自然を守りながら安全に楽しんでもいただくためのルールの普及に努めました。2013年度は、知床ガイド協議会と協力し、ガイドツアー情報や当日のツアー参加希望者へのサービスを充実させました。また、地域で取り組む知床ヒグマエサやり禁止キャンペーンにも協力し、展示の作製、ポストカードの配布等を行いました。

知床自然センター内外刷新業務

しれとこ100平方メートル運動地公開事業や幌別地区活性化を視野に入れ、知床自然センターの北側林内に遊歩道を新設、一般公開しました。また、地元により身近な施設となることを目指して、夏には知床博物館の内田学芸員による高山植物のおはなし会（6月）と、地元斜里町発の小冊子シリエトクノートの発刊を記念したイベント「絵になるシリエトク展」（6月）を行いました。さらに冬には、網走在住の養蜂家を講師に迎えた「蜜蝋キャンドル作り」（12月）、アイスカンドルで知床自然センター前をライトアップした「キャンドルナイト」（12月）の計4つのイベントを実施しました。



▲知床自然センター内の柱まわりの展示



▲羅臼ビジターセンター館内に新設された展示

知床自然センター等管理運営業務

（１）知床自然センター

知床自然センターおよび周辺施設の維持管理、映像展示館（ダイナビジョン館）の運営と料金徴収などの業務を行いました。2013年度の知床自然センター入館者数は154,426人で、前年比92.4%となりました。映像展示館入館者数は17,513人（前年比87.7%）、売上は6,355,020円（前年比91.0%）であり、いずれも前年値を下回りました。



▲知床自然センターのダイナビジョン館

（２）知床自然教育研修所

ボランティアやインターン、外部研究者が活動する際の拠点となる知床自然教育研修所の維持管理を行いました。2013年度はのべ332人(1,318人泊)の利

用がありました。また、知識の習得や技術の向上を図り、学際的な交流を進める「しれとこゼミ」の会場としても活用されました。

（３）知床五湖園地

ヒグマについての安全管理、およびオートキャンプによるゴミなどの散乱防止のため、知床五湖園地の入口を夜間閉鎖しました。また知床五湖園地への給水設備の維持管理を行いました。4月上旬に水源

地から園地までの通水作業を行い、11月中旬に水落とし作業を実施するまでの間、給水設備の維持管理を実施しました。

羅臼ビジターセンター管理運営業務

羅臼ビジターセンターの来館者数は34,481人（前年比97.7%）でした。例年開催している自然観察会を4回、特別展示を7回開催しました。自然観察会には羅臼町民を中心に各回10名前後の参加者があり、好評を得ています。冬期間には特別展示室の一部をキッズスペースとしてレイアウト変更し、ゆっくりとくつろげる空間づくりを行いました。また、展示

物の簡単な説明文を作成し各展示物へ付け加えた、大型展示の配置換えを行い、館内の展示環境を刷新しました。新たな展示物としては、羅臼ビジターセンター周辺の遊歩道や羅臼岳登山道、羅臼湖歩道を来館者へ紹介するため、アクリルパネルを用いた大型地図を作製し設置しました。

ルサフィールドハウス管理運営業務

4月1日から10月31日及び2月1日から3月31日に開館しました。来館者数は6,464人（前年比87.7%）でした。知床半島先端部に立ち入る際のルールや海岸トレッキングをする際の服装や装備、注意点等に

ついて館内展示を活用しレクチャーを行いました。解説に活用する展示については、新たな情報を盛り込んだものに更新するなどの工夫を随時行っています。



▲ルサフィールドハウスの館内展示

公益事業 調査研究・野生動物対策事業



▲GPS 首輪を装着されたエゾシカ



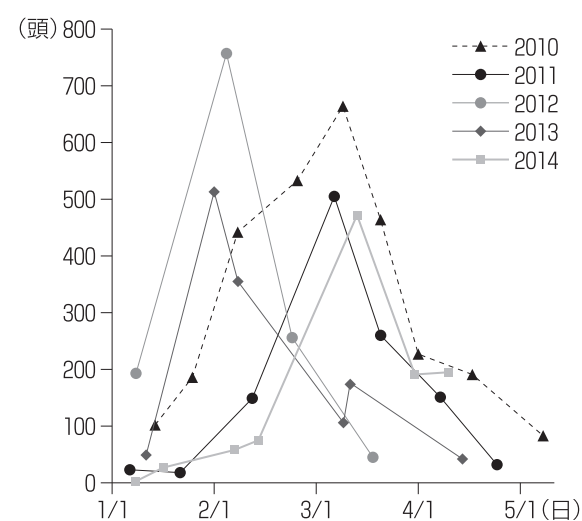
▲ルシャ地区でのヒグマ麻醉銃捕獲



▲捕獲したヒグマの体重測定

エゾシカ個体群の動態に関する調査

知床半島内の重要なエゾシカ越冬地の一つとなっている斜里町真鯉地区において、国道上からのエゾシカ日中カウントを冬期間に計7回（2014年4月を含む）実施しました。シカの確認頭数は3月中旬が最多となり、472頭でした。最大確認頭数は2011年度が752頭、2012年度が517頭でしたので、この地区のシカは依然高密度状態を維持していると考えられます。なお1kmあたりの確認頭数が国指定鳥獣保護区外では保護区内のそのの半分以下であったことから、一般狩猟による捕獲圧がシカの個体数抑制効果を一定程度有していることが示唆されました。また、遺産地域内におけるエゾシカ捕獲（密度操作実験：環境省事業）などによるエゾシカの行動変化を把握するため、2012年度にGPS首輪を装着した個体（メス成獣3頭）の追跡を引き続き実施しました。斜里町側の幌別ー岩尾別地区の追跡個体では盛夏の高標高への移動（山登り）が、羅臼町側のルサー相泊地区の個体では厳冬期の山登りが認められました。



真鯉地区の国道沿い（約8.5km区間）でカウントされたエゾシカの数

知床の暮らしと生き物を守る電気柵導入実験

知床岬先端部にある斜里側文吉湾と羅臼側赤岩地区の漁業番屋へは、ヒグマが出没してもすぐに駆けつけることができず、対策に苦慮していました。そこで2012年度、アサヒビール株式会社様からご支援をいただき、ヒグマを近づけないための電気柵を設置しています。2013年度は、文吉湾では冬の間撤去していた電気柵を春に再設置し、草刈りなどの維持管理を行い、秋に再び撤去するという作業を行いました。赤岩地区では、天然昆布の生育が悪かったために番屋使用期間が例年になく短いということで、漁業者と相談の上、電気柵の再立上げは行わず、次年度に向けた機材の点検作業を行いました。



▲文吉湾での電気柵設置作業

ルシャ地区におけるヒグマの生態等に関する調査 **DAIKIN**

斜里町ルシャ地区を利用するヒグマを、目視と遺伝子分析（分析試料はヘアトラップにより採取した体毛、麻醉銃ダートバイオプシーによる皮膚組織片、回収した新鮮クマ糞など）によって個体識別し、個体間の血縁関係やルシャ地区から外への移動分散状況などを調査しました。ヘアトラップでは、これまでの海岸線での調査では観察されていなかった9頭（オス8頭・メス1頭）の存在が新たに確認されました。また若いメスを麻醉銃で生け捕りにし、GPS首輪を装着して放獣することにも成功しまし

た。この個体はウブシノッタ川周辺で主に活動し、時々ルシャ地区へ出現していました。また一度だけ羅臼町側のキキリベツ川流域まで移動していることもわかりました。2013年度に羅臼町内で有害駆除されたヒグマ2頭（オス）はともにルシャ地区に関係した個体であり、斜里町内で有害駆除された9頭のうち1頭がルシャ関連個体でした。なお、この調査はダイキン工業株式会社様との協定に基づく知床財団の独自事業として、知床博物館および北海道大学と共同で取り組んでいます。



▲ヘアトラップに絡まったヒグマの体毛



▲ヘアトラップをくぐるヒグマ

岩尾別におけるヒグマの生態等に関する調査

ヒグマのメス2頭を箱ワナで生体捕獲し、GPS測位機能を持つ発信機をつけて行動追跡を行いました。捕獲した2頭のうち1頭は前年度捕獲個体と同一、もう1頭は2009年度捕獲個体と同一でした。2頭はいずれも夏期に低標高帯から高標高帯の間を行き来しており、12月下旬には動きが止まり冬眠したと考えられました。この2頭はシーズンを通して人前

に姿を現すことはほとんどありませんでした。また、岩尾別川流域に頻繁に出没していたヒグマ3頭について、麻醉銃での組織採取を試み、遺伝子の分析が進められています。さらに、有害捕獲等で得られたヒグマの頭骨13個体分について標本作製しました。



▲オジロワシの営巣木調査



▲陸からトドを観察する職員

希少鳥類などの長期モニタリング

知床のオジロワシの繁殖状況に関わる調査員によって構成されている「オジロワシ長期モニタリンググループ」の事務局を引き続き担い、情報の集約と会議運営をしました。知床財団が調査担当となっている営巣木については、当年の営巣の有無や雛数

等について情報収集しました。また、冬期のオジロワシ・オオワシ飛来状況の長期変動傾向を把握するため、羅臼町の海沿いで計数調査を実施しました。1月から3月の間に4回調査を実施し、最大で464羽のワシ類を確認しました。

海生哺乳類のモニタリング

冬期にトドの来遊海域となっている羅臼町から標津町北部の沿岸において、陸上の定点からのカウント調査を継続実施しました。2013年度冬期の最大確認頭数は、1月1日の110頭でした。従来と同様に、中部千島生まれの標識個体が多数確認されました。2013年度はメス成獣群の来遊が例年より2週間以上早く、このことが秋鮭定置網などでの漁業被害増加につながった可能性が考えられました。また1月7～

8日に北海道区水産研究所により実施された根室海峡のトド航空調査と同時に、陸上定点からのトド群の目視観察およびビデオ撮影をおこなった結果、根室海峡のトドのモニタリングに関しては、同一群の長時間観察が可能な陸上定点調査の方が、航空調査よりも手法として適していることが示唆されました。

水域における生物群集のモニタリング

知床らうす深層水からは、珍しいソコイワシ科魚類の1種が7月に捕獲されました。また、漁業者やダイバーから届けられた知床沿岸では極めて珍しいホシエイや知床沿岸域での初記録となるキュウリエソやハネガジが記録されました。さらに、知床に隣接する島で2012年に採集した標本の同定も進めており、魚類27種と貝類61種を確認しています。



▲らうす深層水によって採集された深海魚の稀種、ソコイワシの一種

学術的な交流と成果公表

学会発表

- 知床半島ルサー相泊地区におけるエゾシカの個体群モニタリング
石名坂 豪（知床財団）・田澤道広（羅臼町）・白柳正隆・能勢 峰・遠嶋伸宏・葛西真輔・山中正実（知床博）・寺内聡（環境省）・増田 泰 日本哺乳類学会 岡山理科大学（岡山） 2013年9月
- ヒグマにとって厳しかった夏ー2012年、知床での事例ー
下鶴倫人・森脇 潤（北大獣医）・山中正実（知床博）・中西将尚・石名坂 豪・葛西真輔・白柳正隆・能勢 峰・増田 泰（知床財団）・坪田敏男（北大獣医） 日本哺乳類学会 岡山理科大学（岡山） 2013年9月
- 知床羅臼深層水により採集された動物プランクトン群集の季節変化：優占カイアシ類 Metridia 属2種の個体群構造
有馬大地・山口 篤・阿部義之（北大院水産）・松野孝平（極地研）・野別貴博（知床財団）・今井一郎（北大院水産）日本海洋学会 東京海洋大学（東京） 2014年3月
- 北海道知床半島におけるヒグマによる河畔林への海由来栄養塩の輸送
越野陽介（北大院水産）・野別貴博（知床財団）・工藤秀明・桜井泰憲（北大院水産）・帰山雅秀（北大国際本部）日本生態学会 広島大学（広島） 2014年3月

- 知床羅臼沖における海棲哺乳類の受動式音響モニタリング
大槻真友子（北大院環）・赤松友成・安部幸樹（水総研水工研）・野別貴博（知床財団）・桜井泰憲（北大院水）・三谷曜子・宮下和士（北大FSC）日本水産学会 北海道大学（函館） 2014年3月
- 知床半島沿岸域に回帰したカラフトマス（*Oncorhynchus gorbuscha*）の鉛直・水平移動パターン
篠原 陽（北大院環）・本多健太郎（北大FSC）・野別貴博（知床財団）・宮下和士（北大FSC）日本水産学会 北海道大学（函館） 2014年3月
- Diel and seasonal changes in the acoustical presence of marine mammals off Rausu, northern Japan.
Mayuko Otsuki, Tomonari Akamatsu, Koki Abe, Takahiro Nobetsu, Yoko Mitani, Yasunori Sakurai, Kazushi Miyashita Marine Mammal Conference 2013 Otago University, Dunedin, New Zealand, December 2013



▲シホテ・アリン自然保護区副所長による講演会

ポスター発表

- トド採捕個体体重推定方法の検討
後藤陽子（稚内水試）・夏目雅史・和田昭彦（道中央水試）・星野 昇・三橋正基（釧路水試）・石名坂 豪（知床財団）・服部 薫（北水研）・磯野岳臣・山村織生 日本哺乳類学会 岡山理科大学（岡山） 2013年9月
- 知床半島ルシャ地域におけるヒグマの血縁関係解析
森脇 潤（北大獣医）・下鶴倫人（北大獣医）・山中正実（知床博物館）・中西将尚（知床財団）・永野夏生（北大獣医）・増田 泰（知床財

学術誌

- Keiko Kubo, Katsuyuki Yamaguchi, Tsuyoshi Ishinazaka, Wakana Yamada, Kaoru Hattori, Shunitz Tanaka (2014) Maternal-to-fetal transfer and concentration profiles of PCB congeners for Steller sea lions (Eumetopias jubatus) from Hokkaido, Japan. Marine Pollution Bulletin, 78 : 165-172.

報告書

- 中川 元・森 信也・石井英二・涌坂周一・山中正実・増田 泰・田澤道広・石名坂 豪・白木彩子・山本 幸 (2014) 知床半島におけるオジロワシの繁殖モニタリング. 知床博物館研究報告36 : 23-28.

- 団）・藤本 靖（南知床ヒグマ情報センター）・坪田敏男（北大獣医） 日本哺乳類学会 岡山理科大学（岡山） 2013年9月
- サハリンにおけるカワウソ Lutra lutra の生息状況と漁業への影響評価
村上隆広（知床博物館）・マケエフ セルゲイ（サハリン水産資源保護増殖・漁業調整局）・オレイニコフ アレクセイ（ロシア科学アカデミー極東支部）・松林良太・増田 泰（知床財団）日本哺乳類学会 岡山理科大学（岡山） 2013年9月

- 新庄康平・辻本翔平・石井博（2014）訪花動物群集と生息環境の現状と課題. 日本生態学会誌, 64 : 7-15.
- 山崎友資・野別貴博（2013）知床半島の世界自然遺産地域に登録された地域内から採集されたヒグマの糞塊中から見つかった貝類. ちりぼたん（日本貝類学会研究連絡誌）43 (1-4) : 80-87.

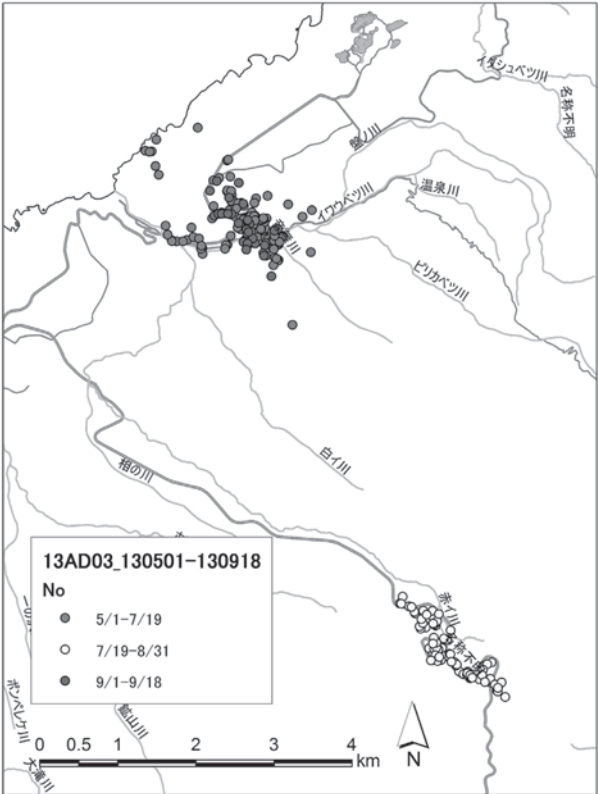
シホテ・アリンとの世界遺産交流

2013年8月に、シホテ・アリン自然保護区の所長ほか1名を10泊11日の予定で知床にお招きし、現地視察等を踏まえて交流に向けた意見交換などを行うべく準備を進めていましたが、直前に沿海地方を襲った水害で中止となりました。その後、2014年2月に札幌で開催される日露隣接地域生態系保全シンポジウム（主催：外務省および環境省）に、新たに所長に就任したゴルシュコフ氏および副所長のス

知床GISデータベースの作成

知床半島の位置や空間に関する様々な情報を取りまとめるGISデータベースの構築を酪農学園大学の協力のもと進めています。今年度は5月に東京で開催されたGISコミュニティーフォーラムにおいて情報収集を行い、その結果をもとにGISデータベースの設計、GISデータの作成、テストサイトの構築を行いました。

テレメシカ13AD03
捕獲日:2013年2月14日



▲エゾシカのテレメトリデータを地図上におとしたGISデータ



▲岩尾別川にてヒグマに近づくカメラマン



▲岩尾別川に投棄されたシロザケ



▲ヒグマパトロール中に遭遇した観光客の車をのぞくヒグマ



▲羅臼の市街地周辺に出没したヒグマ

ヒグマ対策手法の開発

頻繁に出没するヒグマが同じ個体なのか、そうでないのか判断するための簡易的な標識付けの手段として、体表への着色方法について検討しました。まず今年度は、市販されている2種類の防犯用ペイントガンを利用することができるか否かを把握するために、発射実験を行いました。どちらも飛距離は約20m、ペイント弾が破裂し着色可能となる距離は10～15mであることが確認され、動物への応用が可能かどうか検討しています。



▲ペイント弾の発射実験の様子

ヒグマの管理対策

斜里町

2013年度のヒグマ目撃件数は745件、大量出沒が発生した前年度の半数以下となり、対策活動も592件と前年度の6割以下でしたが、2005年度から2011年度までの目撃、対応件数からみると平均的でした。ヒグマによる人身事故は発生しませんでした。国立公園内では特に岩尾別川沿いにおいて、人を恐れない特定個体が頻繁に目撃され、写真撮影目的の公園利用者の危険な接近が常態化しました。パトロールを強化するとともに、多くの公園利用者が集まる中でヒグマを追い払いなければならない困難な対応が連日複数回続きました。また、岩尾別河川内でヒグマの誘引目的で放置されたと見られる多数のサケが発見されました。このような状況を危惧した遺産地域科学委員会が緊急声明を発表、マスコ

ミに取り上げられたことにより岩尾別川のヒグマ問題は国内に広く知られることになりました。また、6月から9月にかけての70日間、巡回員1名が国立公園内をパトロールし、公園利用者への普及啓発活動を行いました。知床五湖の高架木道では五湖フィールドハウスでヒグマレクチャーを受けていない利用者を対象に、ヒグマ生息地でのルールやマナーの周知に努めました。当パトロールにより、ヒグマが停車中の車中を覗きこむといった緊急性の高い情報を随時ヒグマ対策スタッフへ連絡することが可能となり、効率的な対策へ大いに役立ちました。

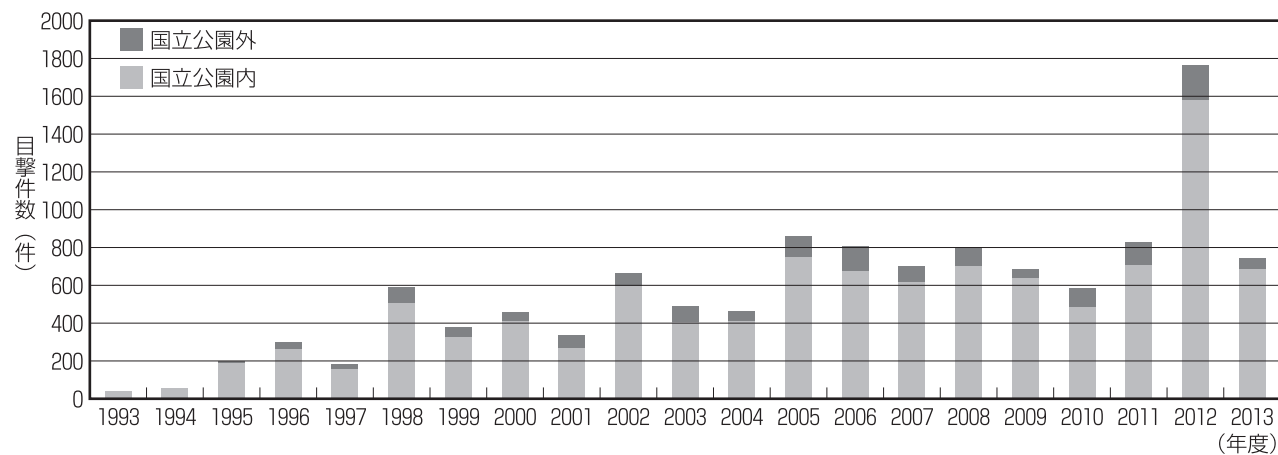
公園外では、ウトロ地区の国設野営場へヒグマが侵入し、利用者を一時避難させた状態で有害捕獲するという危険な事例がありました。

羅臼町

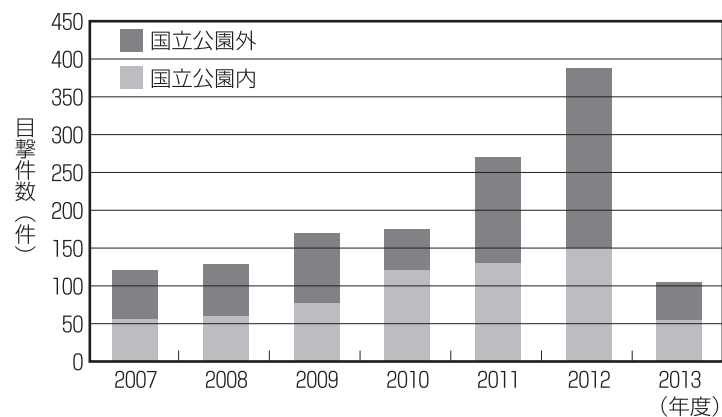
2013年度のヒグマ目撃件数は104件、対策活動は107件でした。どちらも前年度の3分の1程度になりました。有害捕獲は3頭で、過去最多を記録した前年度の45頭から激減しました。特筆すべき事例としては、4月に羅臼町中心部、役場付近をヒグマが横断したことが挙げられます。また、9月から10月にかけて、岬町のケンネベツ川下流にカラフトマスを食べるために繰り返し出沒したヒグマの追い払い対

応が複数回ありました。3月には、冬ごもりから目覚め、活動を始めたヒグマが住宅地に出沒して有害捕獲を余儀なくされました。3月にヒグマが捕獲されたのは、1990年に春グマ駆除が行われなくなって以来の出来事となりました。また、前年度から継続して羅臼町内における国立公園内3ヶ所にヒグマ出沒に関する注意看板を設置しました。

斜里町のヒグマ目撃件数(年度別)



羅臼町のヒグマ目撃件数(年度別)





▲ウトロ港でアザラシを保護する職員



▲ルサ川のキャッチアンドリリース看板

自然環境管理対策業務

斜里町

ゴミの不法投棄は23件あり、多くは食品の包装や容器などでした。国立公園内の岩尾別地区では残飯の入った多数の弁当容器が段ボールに詰められた状態で投棄されるなど、悪質なケースも確認されました。遺産地域内でのゴミの不法投棄やキツネなど野生動物への餌やり行為は未だなくならず、継続的な普及啓発が必要な状況です。サケ・マスの遡上シーズンになるとフンベ川や遠音別川などの河口付近の駐車帯に車内泊をする釣り人が増え、ゴミや糞尿の放置が問題となったため、注意看板を設置しました。

野生鳥獣死体の処理件数は31件あり、約半数がエゾシカでした。海獣（アザラシ、トド、オットセイ）の処理件数は5件と例年よりやや多い状況でした。また、希少種ではオジロワシ1羽の死体を真鯉の海岸で回収しました。

傷病鳥獣は12件対応しました。春先に衰弱したエ

ゾタヌキやゴマフアザラシの幼獣の保護が相次ぎました。多くは回復状況をみて山野へ戻しましたが、収容後に死亡してしまうケースもありました。ゴマフアザラシのうちの1頭は、紋別とっかりセンターへ移送され、学術調査のため発信機が装着されオホーツク海へ放たれました。



▲不法投棄された弁当ゴミ

羅臼町

傷病鳥獣の対応は48件ありました。希少鳥類のオオワシとオジロワシへの対応は各3件、計6件ありました。また、特定外来生物に関する情報収集や捕獲作業を行いました。アライグマの目撃情報は2件ありましたが、捕獲には至りませんでした。町内各地区で実施した計27回のパトロールでは、路上などに

不法投棄された食品系ゴミを複数回発見、回収したほか、国立公園利用者の指導も随時実施しました。また、希少猛禽類の重要餌資源となっているオシロコマを保全するため、釣り人に向けたキャッチ&リリース看板を羅臼町内主要河川の7ヶ所に設置しました。

エゾシカ関連業務

今年度も冬期間の一大事業としてエゾシカ捕獲に取り組みました。囲いわなを5基設置稼働し、シャープシューティング（道路を閉鎖しての銃捕獲）を2ヶ所で行ったほか、知床岬では大型仕切柵を利用した捕獲を実施しました。また、2013年度岩尾別台地の草原へ新たに設置された大型仕切柵での捕獲も行いました。初冬に雪が少なくエゾシカの越冬地への集結が遅れたことや2月下旬の大雪による

除雪をはじめとしたわなの維持管理など、様々な難題に直面しましたが、囲いわなで279頭、シャープシューティングで85頭、知床岬での巻狩りで19頭、岩尾別大型仕切柵で44頭の計427頭を捕獲しました。

また、エゾシカ捕獲事業の最終的な目的である植生回復について、その成果を測るエゾシカ捕獲対象地の植生変化を把握する調査をサポートしました。



▲幌別川河口に新たに設置された囲いワナ



▲羅臼でのシャープシューティングの様子



▲知床岬に設置された大型仕切り柵



▲羅臼での電気柵設置の様子

外来生物の調査・対策

知床岬地区では特定外来種であるセイヨウオオマルハナバチの駆除作業を6～9月に4回実施し、計80頭を捕獲しました。合わせてアメリカオニアザミの刈り取りも分布抑制のために行いました。ウトロ地区ではセイヨウオオマルハナバチの営巣地探索を7～8月に計3回実施しました。うち1回については、啓発イベントとして地域住民とともに探索作業を行

いました。羅臼地区では、7～9月に相泊～観音岩における海岸線でアメリカオニアザミの駆除を実施しました。これまでの鎌やハサミを用いた駆除方法では、花茎を再生させて再び繁殖する可能性が高いことから、根から引き抜く方法で約15,000株を開花前に除去し、同区間における同種の繁殖を防止しました。



▲ウトロ住民対象のハチの営巣地探索イベント



▲アメリカオニアザミの駆除の様子

地域住民とヒグマの安全安心共存プロジェクト **DAIKIN**

人の生活圏への野生動物の侵入を防止し、住民の安全と安心を確保するために2011年度から羅臼町の2ヶ所を対象として電気柵の設置を進めています。設置開始から3年目となる2013年度は、対象2ヶ所中の1ヶ所となっているキキリベツ～相泊間の未設置区間（昆布浜から相泊）への設置が完了しました。それが功を奏してか、今年度の電気柵設置区間でのヒグマの目撃はありませんでした。

なお、本業務はダイキン工業株式会社様との協定に基づく羅臼町からの受託事業となっています。



▲羅臼町に新たに設置された電気柵



▲ルサ川を遡上するシロザケ



▲貝類を種別に数える職員



▲クマゲラ調査の様子

遺産地域とその周辺における調査業務

サケ科魚類の遡上状況調査業務

遺産地域登録後から進められているダムの改良に伴うカラフトマスとシロザケの遡上状況に関する調査を、羅臼町のサシルイ川とチエンベツ川で8月から12月まで実施しました。その結果、改良の効果は維持されている、あるいは向上してきていることが示されました。また、ダムのないルサ川で遺産地域のモニタリングと位置付けられているカラフトマスの遡上数カウント調査を8月下旬から10月下旬まで週2回、8:00から16:00まで2時間おきに20分間行いました。9月上旬から10月下旬まで遡上が確認され、分析の結果、計20,000尾以上ものカラフトマスが遡上したと推定されました。

浅海域貝類定量調査業務

遺産地域の長期モニタリング計画において調査項目のひとつに位置づけられている岩礁潮間帯に生息する貝類を対象とした定量調査を5年ぶりに東京農業大学の協力のもと実施しました。調査は8月と11月にそれぞれチャシコツ崎、文吉湾、知床岬灯台下、相泊の4ヶ所で行いました。代表種について5年前に実施された調査の結果と比較したところ、出現種の組成や個体数に大きな違いは見られませんでした。

海岸ゴミ

2009年度に海岸漂着ゴミの大規模回収を実施した知床岬地区において、その後のゴミの増減について2012年度からモニターしています。部分的にゴミがやや多くなってきている場所もありましたが、2009年度の回収後の状態から全体として大きな変化はありませんでした。

クマゲラ生息状況調査

知床半島の国立公園区域外におけるクマゲラの生息状況について、羅臼側では知西別川から崎無異川、斜里側ではオショコマナイ川からオクシベツ川にかけて、各10定点を設けて、10月から12月の早朝に声や姿、採餌などの痕跡の有無を記録しました。その結果、羅臼側と斜里側でクマゲラの出現状況に大きな違いがありました。羅臼側では採餌痕や古穴があった地点を含め全ての定点でクマゲラは出現しませんでした。一方、斜里側では、7定点で声と姿を観察し、採餌痕に加えてねぐら穴や巣穴と思われる古穴を確認しました。採餌痕の多くはトドマツなどの針葉樹にあり、クマゲラが出現した地点ではトドマツを中心に針葉樹が多く記録されました。そのため、知床半島におけるクマゲラの生息状況を説明する要因として、針葉樹の有無が関係している可能性が示されました。

知床国立公園における海域利用適正化に向けた調査

羅臼側の海域利用の適正化に資することを目的として、根室海峡で冬季運航している観光船からの海ワシ類（オジロワシ・オオワシ）への餌やりの状況と、ワシ類の飛来状況を調査しました。また、海ワシ類への餌やりに対して冬季の羅臼観光船利用者やウトロの冬季滞在者がどのようにとらえているかを把握するためのアンケート調査を実施しました。観光船からの餌やりでは、魚のあらなどをまとめて置く方法と、1尾ずつ手投げする方法の二通りあり、それぞれワシの集まり方に違いがあることがわかりました。



▲船からワシ類を観察する職員

科学委員会等運営業務

知床世界自然遺産地域を適切に管理するために、科学的な見地からの行政への助言が科学委員会会議やその付属会議によって行われています。知床財団は科学委員会（7/30 斜里町、2/27 札幌市）とエゾシカ・陸上生態系ワーキンググループ会議（6/24、9/29、ともに釧路市）の運営事務局として、日程調整、会場準備、資料作成、議事録作成、地元向けニュースレター作成などを担いました。



▲知床科学委員会の様子



▲知床五湖のカウンターにて「くまレク見て トクキャンパン」を紹介する職員

適正利用・エコツーリズム検討業務

知床財団は、よりよい公園利用のあり方を目指し様々な協議や試行事業に参加しています。適正利用・エコツーリズム検討会議（知床世界自然遺産地域科学委員会、利用適正・エコツーリズムワーキンググループと知床世界自然遺産地域連絡会議、利用適正・エコツーリズム部会の合同会議）では、知床エコツーリズム戦略が合意され、地域提案型の利用のあり方やルール作りの仕組みが確立されつつあり、知床財団もこうした取り組みに参画しています。また、エコツーリズム戦略の提案に基づき、今年度新規に発足した2つの部会（「知床ロングトレイル・プロジェクト部会」「先端部エコツアー部

会」）の議論に参加しました。

知床五湖の新たな利用システムを広く地域の皆さんに体験してもらうため「知床五湖町民ウェルカムキャンペーン」と「くまレク見てトクキャンパン」の2つの企画を実施しました。ウェルカムキャンペーンでは、斜里・羅臼の両町民に対し、通年で地上遊歩道を無料で楽しめるサービスを提供しました。くまレク見てトクキャンパンでは、五湖の新制度に賛同する協賛店舗を募集し、地上遊歩道の利用者が協賛店舗で特典を受けられるサービスを企画しました。20の地元店舗にご協力いただき、約2,500人の方がキャンペーンを利用しました。

知床五湖利用適正化業務

知床五湖では2011年より自然公園法による利用調整地区制度に基づく新しい利用システムが導入されました。新制度はヒグマに関するリスク管理体制、観光地における認定ガイド制度など、様々な面で先進的な取り組みとして注目を集めています。知床財団は制度運営の要となる指定認定機関として制度全体の運用を担いました。意思決定の場である知床五湖の利用のあり方協議会の運営事務局を担い、地域の合意形成に努めました。

制度開始3年目となる2013年度はヒグマの出没も少なく、利用調整期間中（4月19日から10月20日）の地上遊歩道利用者数は69,380人となり、前年度比153%と過去最高を記録しました。また、ガイドツ

アーの参加者数も8,946人（前年度比118%）と大幅に増加し、制度の理解と支持が広がりつつあることを実感する年となりました。



▲知床五湖認定ガイドによるツアー風景

カムイワッカ地区利用適正化業務

カムイワッカ地区は、環境保全と混雑解消を目的に、繁忙期を中心にマイカー規制が実施されています（2013年度は8月1日から25日、9月15日から24日の35日間）。知床財団は、マイカー規制の現地連絡調整業務を自動車利用適正化対策連絡協議会から受託し、新設された五湖フィールドハウスを拠点に、バス会社や各地に配置された警備員や巡視員との連絡調整、負傷者への対応等を行い、運営の円滑化に努めました。また、これまで課題ごとに分かれていた協議会が、適正利用・エコツーリズム検討会議の下に統合、一本化され「カムイワッカ部会」となりました。知床財団は、当部会の運営事務局を担うと同時に、構成メンバーの一員として、今後のカムイワッカの利用のあり方について積極的に提言を行いました。



▲カムイワッカ湯の滝

ホロベツ地区活用検討業務

1980年代から斜里側の公園利用の拠点として位置づけられてきたホロベツ地区に焦点をあて、現在知床が直面している課題（アクセス、情報発信、新たな利用エリア）を解決する拠点としての再構築を検討しました。ホロベツ地区は利用者数の大幅な落ち込みが深刻となる一方、施設および人的資源の蓄積があり、アクセス上の立地、観光資源の潜在力といった観点から、公園利用上の様々な課題を解決する可能性を持つ場所であることが明らかになりました。



▲ホロベツ活用検討業務のプレゼンテーションの様子



▲羅臼湖ルール の普及ポスター

▲アジア公園会議でのポスター発表

羅臼地区適正利用・エコツーリズム検討業務

知床半島先端部地区利用の心得推進業務

「知床半島先端部地区利用の心得（以下、利用の心得）」の改訂に伴い、利用の心得の冊子及びWEBサイト「シレココ」の修正を行いました。要約版パンフレットの作成も行い、山岳会等の関係団体へ配布し新たな内容について周知しました。

また、知床半島先端部を利用する遊漁船関係者、ガイド事業者等とともに利用の心得の改訂部の確認や内容に関する勉強会を開催しました。



▲「シレココ」のパンフレット

知床世界自然遺産地域における適正利用推進業務

2012年に策定された羅臼湖ルール の普及を図るため、ポスターとパンフレットを作成しました。また、羅臼湖をはじめ、羅臼ビジターセンター周辺の

自然歩道の利用機会を増やすため、A1サイズの地図を作成し羅臼ビジターセンター内に展示しました。

知床国立公園国際化対応普及啓発業務

近年増えている外国人観光客に対応するため、利用の心得及びパンフレット、羅臼湖ルールパンフレットの英訳と同資料の印刷、配布を行いました。

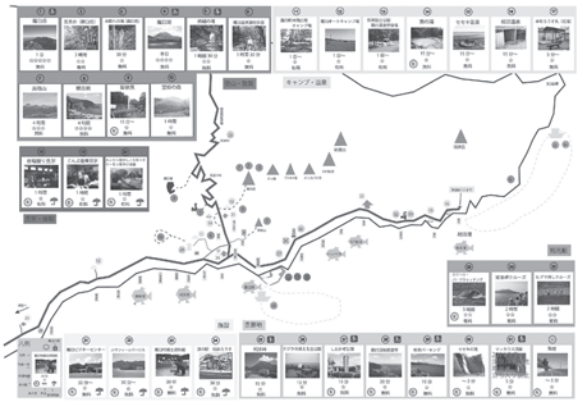
また、今後、施設展示の多言語化などの検討材料として活用するために、観光事業者へ外国人観光客の動向や課題等のヒアリングを行いました。



▲羅臼湖パンフレットの英語版

羅臼町エコツーリズム検討業務

羅臼町からの受託により、エコツーリズム事業を検討する際の資料とするため、羅臼町内に存在する大小様々の観光ポイントの洗い出しと、その内容を盛り込んだ地図や解説資料の作成を行いました。観光事業の実施や紹介の際は、ホエールウォッチングや羅臼湖、羅臼ビジターセンターなど大きな規模の拠点に目が行きがちですが、今後は小さいながらも魅力ある拠点も活用し、より多様なエコツーリズム事業が開発、展開されていくことが期待されます。



▲羅臼町の観光名所地図

学術交流と成果発表

ポスター発表

■ New system aim at visitor risk management in the brown bear habitat of Shiretoko national park.
Keita Akiba, Tatsuya Sasaki The First Asia Parks Congress, Sendai- City, JAPAN, Nov 2013.

口頭発表

■ Attitudes of visitors and Local stakeholders toward introducing the new visitor restriction programs in a brown bear habitat in Japan.
Tetsuya Aikoh, Kazuki Ohba, Yasushi Shoji, Takahiro Kubo, Keita Akiba The First Asia Parks Congress, Sendai-City, JAPAN, Nov 2013.

シンポジウム等

■ レクチャーとガイドを活用した利用適正化の取り組みー知床五湖利用調整地区制度の導入過程と3年目の実績ー 秋葉圭太（知床財団） 国際シンポジウム「自然公園としての富士山ー5」 山梨県環境科学研究所（山梨）2013年10月

公益事業 森林再生系事業



▲岩尾別川沿いの防鹿柵設置作業



▲産卵環境改善作業の様子

しれとこ100平方メートル運動森林再生業務

斜里町主催「しれとこ100平方メートル運動」の開始から36年、新運動「100平方メートル運動の森・トラスト」として原生の森の再生に向けた取り組みが始まり16年が経過しました。この知床の森を守り育てる取り組みの中で、知床財団は、森づくり作業や森づくりの現場を運動参加者や一般の人々へ公開していく事業など100平方メートル運動に関わる現地業務を担っています。

（１）森林再生作業

森づくり作業は5年毎の回帰作業方式としています。2013年度は、4巡回目の回帰作業の1年目（16年目）にあたり、幌別台地の第1区画を中心に作業を行いました。春から夏にかけて、苗畑での除草や苗木の根づくりを行い、秋には育てたイタヤカエデなどの苗木約200本を防鹿柵の中に植えました。また、樹高5～10メートルにもなる大型苗の移植や老朽化した防鹿柵の改修作業などを進めました。このほか、2010年に取得した知床自然センターやしれとこ100平方メートル運動ハウスに隣接する運動地にて、シカの影響で繁茂するササやワラビの刈り取りや運動と森づくりを伝える場所として公開していくための作業を行いました。



▲運動地公開のためのワラビ作業

（２）しれとこの森交流事業

森づくりの現場と運動参加者をつなぐ交流事業では、「第34回知床自然教室」（7月30日～8月5日、参加者29名）、「第17回しれとこ森の集い」（10月20日、参加者85名）、「第17回森づくりワークキャンプ」（10月30日～11月4日、参加者15名）の企画・運営を行いました。

5泊6日の日程で森づくりに打ち込む「森づくりワークキャンプ」は、リピーター参加者が多く、作業への貢献の面でもなくてはならないイベントです。一方で、新しい参加者の獲得が課題として挙げられていましたが、2010年度より知床財団の独自事業としてワークキャンプ型のイベントを企画・開催しています。2013年度も3回のイベントを開催し（通算11回目）、多くの皆さんにご参加いただきました。



▲知床自然教室の様子

（３）森林再生専門委員会議運営

森づくり作業の方針や計画は、動植物の専門家と地元の有識者で構成される森林再生専門委員会議の場で議論が行われ、その方向性などが定められています。知床財団では、2013年度の活動の成果と課題をまとめるとともに、2014年度の森づくり作業の具体的な方針や計画案を、斜里町と検討を重ねながら立案しました。

11月に開催した会議では、4年後の2017年には本格的な森づくりの開始から節目の20年目を迎えることから、今後4年間でこれまでの20年間のまとめを行っていくこと、そして、次の20年間の方針と目標を策定していくことが確認されました。

（５）河畔林と河川の自然再生業務

岩尾別川沿いの河畔林の復元と河川環境の改善への取り組みの一環として、河原に総延長273mの防鹿柵を新たに設置しました。また、2012年度に岩尾別川沿いで掘り取り、苗畑で育成しているカツラの苗木約250本の床替えや除草作業を行いました。これらの苗木は、来年度、川沿いに新設した防鹿柵の中に植え込んでいく計画です。柵の設置やカツラ苗の育成には、ダイキン工業株式会社様の社員ボランティアの皆様を始め、たくさんの方々にお手伝いいただきました。

河川環境の改善に向けた取り組みでは、サケ科魚

（４）運動地広報企画

100平方メートル運動の広報誌「しれとこの森通信No.16」（A4判カラー24ページ）の企画・編集作業を行いました。なお、同号はページ数を増やし、過去5年間の作業報告号として発行しています。また、知床財団ホームページのブログにて日々の森づくりの様子を発信したほか、「しれとこ100平方メートル運動ホームページ」（斜里町）の全面リニューアルを行いました。



▲しれとこの森通信



類の生息、産卵環境改善を目的に、川の中に大きな石を配置する作業などを行いました。このほか、作業後の変化を把握するために測量や空撮、水位計の設置なども行っています。9月には、大規模な増水が発生し、配置した岩石の一部が流失する状況も起こりましたが、今後も状況把握に努めるとともに、増水の影響を検証し、今後の作業に活かしていく予定です。

なお、本業務は、ダイキン工業株式会社様との協定に基づく斜里町からの受託事業です。

しれとこ100平方メートル運動普及推進業務

知床財団は、斜里町主催「100平方メートル運動の森・トラスト」の安定的な継続と発展を図るため、運動地公開を含めた運動の普及と推進に取り組んでいます。本業務は、知床財団が斜里町と連携を図りながら独自事業として行っています。

（１）普及推進業務

運動の趣旨に賛同する企業や団体、教育機関を対象に、運動地を歩きながら100平方メートル運動や開拓の歴史などを紹介し、そして実際の森づくりの作業も経験する運動地公開プログラムを行いました。地元の斜里高校をはじめ、東京都立南多摩中等教育学校の生徒や日本赤十字北海道看護大学の学生など約353人が知床の森を訪れ、運動と森づくりに触れました。なお、東京都立南多摩中等教育学校の

受け入れは2012年度に続き2回目となり、今後も継続していく予定です。

また、4泊5日の合宿イベント「知床森づくりの日」を3回開催しました。計15名の参加があり、参加者は作業に汗を流しました。冬期は知床自然センター周辺に「スノーシュー・歩くスキーコース」を設置し、利用者に運動と森づくり作業を紹介する地図を配布して普及と公開に努めました。



▲学生による森づくり体験



▲イベント「夏見円さんと歩く冬の知床」

（２）岩尾別川河川調査及び生物相復元

岩尾別川流域で行われる各種作業の成果を検証するため、河畔林と河川環境の調査を行っています。2013年度は過去2年間に引き続き、同河川の定点観測ポイントにて魚類の生息状況と河川構造の現状を把握する調査を行いました。このほか、岩尾別川沿いに設置している防鹿柵内外の植生調査も行っています。

また、生物相復元については、カワウソが生息し

ているロシア・サハリン州を訪れ、カワウソの生息環境を確認したほか、漁業とカワウソの関わり合いなど社会的なカワウソの位置づけについての海外事例の収集に努めました。

なお、これらの取り組みはダイキン工業株式会社様との協定に基づく知床財団独自事業として、知床博物館や東京農業大学など外部の研究者と連携を図りながら進めています。



▲魚類調査の様子



▲ロシア・サハリン州でのカワウソ生息環境の現地確認

収益事業



▲フェニックス様との
コラボレーションTシャツ



▲オリジナル新商品「知床かばん」

販売・有償貸出し業務

オリジナル商品の開発

知床財団の活動を広く知ってもらうことを目的に、オリジナル商品の開発を行いました。2013年度は、オリジナルエコボトル500mlの新色とオリジナル軍手の新色、希望が多かったオリジナルエコボトルの1Lを新たに作成しました。また新商品の知床かばん、職員撮影の写真で作ったオリジナルカレンダーを作製、販売しました。株式会社フェニックス様のご厚意により、商品価格の10%が当財団への寄附金になるオリジナルTシャツは、新デザインが大変好評で早々に完売しました。

知床自然センターにおける販売

知床自然センターでは、知床の自然に関する書籍、散策の際に役立つアウトドアグッズ、自然環境に配慮した知床ならではの土産などを販売し、9,168,943円の売上がありました（前年比102.6%）。また、電話やファックス、電子メール等で注文を受ける通信販売の売上は501,494円でした（前年比145.7%）。

ヒグマ撃退スプレー・フードコンテナの貸出し

知床自然センター、羅臼ビジターセンターおよびルサフィールドハウスで、ヒグマ撃退スプレーとフードコンテナの有料貸出しを行いました。また、羅臼岳登山道入り口にある木下小屋へヒグマ撃退スプレーの貸出しを委託し、希望する登山者に利用していただきました。2013年度は、ヒグマ撃退スプレー197件、フードロッカー9件を貸出しました。貸出しの際には、契約内容や使用方法、ヒグマとの危険な遭遇を回避する方法について20分程度のレクチャーを行いました。

レンタルサービス

知床自然センターで長靴・双眼鏡の有料貸出しを実施し、のべ831人の方にご利用いただきました。来館者の少なくなる冬季においては、入館促進および来館者の満足度向上のために、長靴・スノーシューの無料貸出しを株式会社ユートピア知床様と共同で実施しました。2013年度は、延べ1,425人の方に長靴・スノーシューの無料貸出しサービスをご利用いただきました。

オンラインショップの運営

オンラインショップ「コムヌプリ」の運営・管理を行い、2013年度は133件、838,004円の売上がありました。このうち知床財団の個人賛助会員の入会は、113口（新規31口、更新80口、終身会員2口）ありました（前年登録数は合計96口）。

羅臼研究支援センター維持管理業務

羅臼研究支援センターの維持管理と利用受付、協力金徴収の業務を行いました。利用者数はのべ88人、912泊で、912,000円を施設管理協力金として徴収しました。野生鳥獣の専門家や大学院教授や大学院生、知床財団のインターン、ボランティアなどが施設を利用しました。



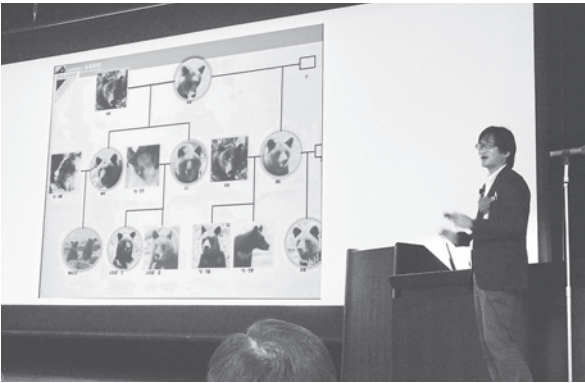
▲羅臼研究支援センター

収益事業

財団管理運営事業

研修、講演、視察対応等

道内外の各種団体から依頼された講演、レクチャー、行政視察等に対応することにより、知床の価値を紹介、または、知床財団の持つ野生動物保護管理や調査研究、公園管理、環境教育のノウハウを広く提供・共有する活動を行いました。



▲増田事務局長による講演

財団法人管理運営業務

理事会は、5月に第1回理事会を開催し、2012年度事業・決算報告及び、特定費用準備資金積立について審議しました。10月に第2回理事会、12月に第3回理事会を開催し、賛助会員の入会承認について審議しました。3月には第4回理事会が開催され、2014年度事業計画・予算等について審議しました。定時評議員会は5月に事業・決算報告について審議しました。その他、代表理事と事務局により年2回以上開催が義務づけられている運営会議を9月と3月に開催しました。また、理事会評議員会の開催時に事務局会議を行い、3月には今後5年間の「中期的経営収支の試算」を作成しました。

役 員

理 事 長	関 根 郁 雄
副理事長	辻 中 義 一
理 事	佐々木 泰 幹
//	鈴 木 完 也
//	大 瀬 昇
//	田 澤 道 広
//	北 雅 裕
監 事	中 川 元
//	宮 腰 實
評議員長	高 橋 一 三
評 議 員	吉 野 弘 志
//	木野本 伸 之
//	遠 山 和 雄
//	金 澤 裕 司
//	吉 野 英 治
//	小 川 雅 勝

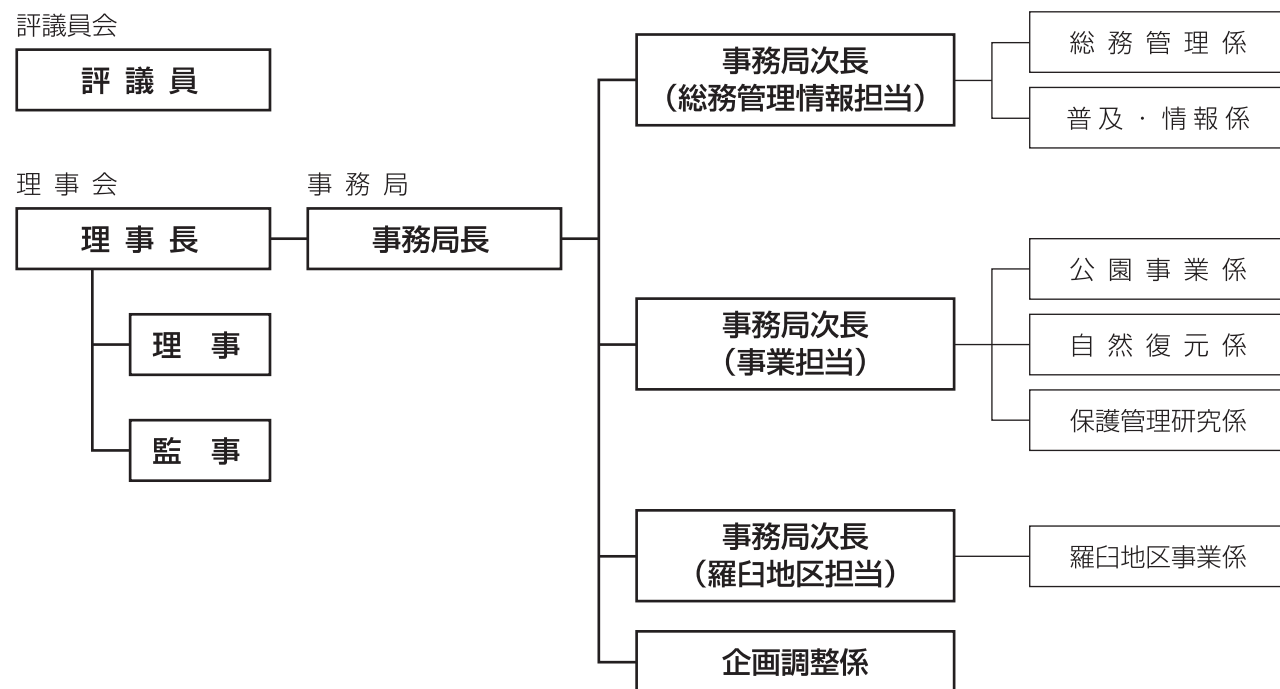
2013年度研修・講演・視察対応等受け入れ対応実績

講 演	第52回北海道高等学校登山選手権大会（北海道遠軽高等学校）
	平成25年度電気学会 電子・情報・システム部門大会（北見工業大学）
	利活用技術指導者育成研修事業 衛生管理・残渣減容化研修会（株式会社 一成）
	南三陸町を見つめ、未来を語るフォーラム（南三陸町観光協会）
	シンポジウム「日本の野生動物管理の転換点」（酪農学園大学）
	日本機械学会流体工学部門北海道地区流体工学研究会（北見工業大学）
	広域捕獲促進モデル事業における会議及び広域捕獲活動 （北海道環境生活部環境局エゾシカ対策課）
	西武学園文理小学校
	第5回標津アニマル・プロジェクトフォーラム（標津町）
	電機連合
視察受け入れ	鹿児島県議会環境厚生委員会
	山口県議会環境福祉委員会
	鹿児島県議会県民連合
	日本の森を守る地方銀行有志の会
研 修 実 習	北海道大学 獣医学部
	酪農学園大学 環境システム学部 生命環境学科
	北海道小清水高等学校
	札幌市立大学デザイン学部
	東京農業大学 生物産業学部 アクアバイオ学科
	東京都立南多摩中等教育学校
	日本赤十字北海道看護大学 看護学部1年生
	J I C A研修（酪農学園大学）
	J I C A研修（特定非営利活動法人 EnVision 環境保全事務所）

組 織 概 要

名 称	公益財団法人 知床財団（2011年4月に名称変更 旧名称 財団法人 知床財団）
設 立	昭和63年（1988年）9月23日
設 立 者	斜里町・羅臼町
基本財産	4,500万円
所 在 地	〒099-4356 北海道斜里郡斜里町字岩宇別531番地 知床自然センター
目 的	この法人は、知床半島及びその周辺地域の自然環境に関する調査・研究、自然保護の普及啓発等の事業を行い、もって広く自然保護の保全と利用の適正化に寄与することを目的とする。
事 業	(1) 野生動植物の調査・研究 (2) 自然保護の普及啓発 (3) 自然保護に関する諸団体との提携 (4) 自然環境の保全管理及び公園施設等の管理運営受託業務 (5) その他この法人の目的を達成するために必要な事業
職 員	41名

2014年4月末



知床の価値ある自然を
私たちと一緒に守りませんか

<http://www.shiretoko.or.jp/supporter/supporter.htm>

「どなたでも知床の自然保護活動に貢献できます！」

知床の自然を未来へ遺していくためには、皆様の継続的な支援が不可欠です。

皆様が知床の自然を思う気持ちを私たちに託して下さい。

知床財団の賛助会員制度

会員になると、知床自然情報誌SEEDSや刊行物を定期的にお届けする他、知床自然センターの映像展示館の入館料免除など、各種特典があります。

個 人 年 会 員	5,000円/年	法 人 年 会 員	20,000円/年
個 人 終 身 会 員	100,000円/終身	法人特別年会員	100,000円/年
寄 付	おいくらからでも受け付けています。 (5千円以上のご寄附いただいた方に本誌を1部お送りします。)		

●振込先 郵便振替 02750-2-37694 ●加入者名 公益財団法人 知床財団

